

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと、風

第90号（2013年11月）

風に吹かれて（68）

白井啓治

『秋霖（しゅうりん）にうたれて』

蟻螂（かまきり）土に還る』

秋も深まり夏の命が次々と土に還って行く。縁の下から死暮れをまつ蟋蟀の声が侘しくコロロと枕に届く。

異常気象だとか、なんだかんだと言っている間に、時の移ろいはあつと言う間に駆け抜け、喧しく鳴いていた虫達も土に還る頃となつてしまった。庭の雑草をかき集めていたら、蟻螂の死骸が出て来た。胴体の部分が腐敗していたから、もうすぐ全部が土に還るのだろう。

狭い庭ではあるが、そこには地球の営みがそっくり縮小版としてある。そんな事を思いながら、狭い庭でもいろいろ楽しむことが出来るものだと実感すると共に感嘆している。

十月二十三日〜二十五日、ことば座の東京公演が無事終了することができた。かつての弟子であったプロデューサーの仲間達が全くのボランティアで舞台作りを手伝ってくれて、地方の極貧極小劇団とは思えない舞台を創ることが出来た。特にスペシャルゲストとして出演して頂いたバ

ントマイムのヨネヤママコさんには、大変な無理を言い、詩の朗読を主旋律にしたマイムダンスを演じて頂いた。

流石に巨星ママコであった。出演者の中で一番小さな彼女が、舞台では一番大きく見えた。舞台が狭いとすら思えた。

毎日昼前には劇場に来て、舞台に立ち、繰り返し稽古をする。そして、毎日、此処の部分を中心な風にマイムダンスしたいけれど良いでしょうかと打ち合わせに来る。出演者の中で、毎日、今日はここをこうしてみたいと演出家である私に言ってきたのは彼女一人であった。

変更や工夫を言つてこないのは一生懸命ではないという事ではない。小林さんにしろ柏木さんにしろ精一杯やっていた。しかし、ママコさんには今もなお己の「伸びしろ」を意識して創っているのである。「昨日より今日の方が絶対に良い。間違はなく昨日を突き破っている」という伸びしろを創りだしているのである。

これは小林には絶対に見習ってもらいたい事である。昨日より上手く、上手に、ではなく昨日を突き破つて新しい世界を創る、という事である。舞台で見せる以上美しくなければならぬ。しかし、それ以上に昨日を突き破り、突き抜ける表現の力を爆発させたい。それが、舞台に生きるとい

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平 智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

う事なのだ。ママコは意識しないでそれを行っていたのであった。この事をしっかりと小林には盗み取って貰いたいものである。すべてにおいて「伸びしろ」というのは、その事を切実に意識しなければ直ぐに硬化し、失せてしまう。監督、作家の口ぐせは「自分の代表作は次」である。それは自分の伸びしろを信じて疑わないからである。己の伸びしろを自ら硬化させ、現状を突き破り、突き抜ける力を消失してしまうことぐらい愚かで情けない事はないだろう。市長選が終わり、新しく市長が誕生したわがふる里にも、伸びしろを硬化させないで現状を突き破る柔軟な伸びしろを養いたいものである。

① 2020年オリンピックが東京に:

オールジャパンでよく頑張った。

東京開催が決まった背景には、日本は、衛生と治安の良さが結果として長寿国であり、内乱などない「社会的熟度」の高い国とする総合評価が根底にあったに違いない。人は褒められれば、なお一層頑張るもの。国民一致団結で、大会を成功させたい。

阿部総理はG20会議を中座し、プレゼンで、敢えてマイナス面の放射能問題を取り上げ、国がしっかりと対処すると宣言した。IOC委員の後日談によると、それが決定的に支持を得たようである。そして、高円宮久子様が流暢な英語で、震災救援の謝礼を述べ、佐藤真海選手の笑顔のスピーチが、実に好印象を与えたようである。

さて日本は、いかにして大会を成功に導くか。資金調達、会場施設や道路のインフラ整備、空港への利便性、地方との調和、ユニークさをいかに表現するか。テロ対策や、「おもてなし」をいかに…。7年後までに本当に放射能問題は解決できるのか。観光地の接客準備は完璧か？

ネガティブ思考だけでは前に進めない。決まった以上は最高の演出を目指し、国をあげて皆で頑張るほかない。これを機会に長年の沈滞ムードを払拭し、災害復興と、日本活性化の起爆剤とすべきだ。

今やオリンピック参加国数は、国連加盟国数193を上回る。世界から多数の選手・役員・観客が訪れる。日本の文化に、しみじみと接してもらい、リピーターとして末永く再来されるよう、そ

の魅力をたっぷり紹介するよい機会だ。

そこで最も気がかりな事は、内部問題。東京一極集中が過剰になり、地方が忘れ去られはしないか。過疎化した地方が「おいてけぼり」は酷すぎる。東北復興建築の鉄筋工の日給1万8千円に対し、東京では(オリンピック需要を見込み)2万6千円。人も資材も地方では不足。復興住宅建築の入札に応募者がいなかったとの事。災害復興の予算はあっても、事業は進んでいない。

地方住民は同じ人間として生まれ、同じ憲法の元に平等が約束されていながら、それは単なる表向き。真実は人口減少、所得格差。超高齢化社会、めぼしい産業無し。

東京一極集中の弊害は、政治・経済も、教育・芸術も、みんな大都会に集中。テロや巨大な自然災害があつたらどう防ぐつもりか。東海大地震発生など時間の問題だ。

更に、インフルエンザなどよりはるかに強力な感染症が大都会に蔓延する構図を、為政者は考えた事があるだろうか？ 9月号で書いた「忍び寄る恐怖」の天然痘周辺事情が、今、大変な危機に面している。アフリカの「サル痘」が、天然痘免疫のない人類に襲いかかっている。それは人類の滅亡につながるがねない。今時そんな事態は起こりっこない:とタカを括っているとしたら、それは甘い。温暖化が急激な勢いで進んでいる今日、マラリアなど熱帯の強力伝染病が無垢の中緯度住民を襲撃するのは朝飯前。温暖化によるゲリラ豪

雨・竜巻・巨大台風などと、熱帯の感染症の中緯度蔓延が重なれば、一極集中した大都市など、一溜まりもないことは明白であろう。

そこでオリンピック開催を機に、外国選手の時

差調整や練習場を地方に分散。恒久的なスポーツ・インフラを地方に定着させ、スポーツ振興のバランスのとれた均衡化を図るべきだ。自然豊かな日本は観光地に恵まれている。地方への誘客を恒常化する手だてをしつかり打ち立てるべきだ。極端な集中を避け、地方に分散することが、巨大自然災害に対する賢明な策と考える。地方を重視する「道州制構想」が浮かぶ所以だ。

今回のオリンピック招致で、日本が世界に範を垂れる最高の演出は、エネルギー問題を長期的に安定化した実現を世界に示す事だろう。その第一は化石燃料に頼る体質の払拭である。天候に左右されず、無限に秘めたエネルギーはなんと云っても「地熱」である。環境を汚染する事なく、無尽蔵に採取できる熱源。それはマグマのエネルギーだ。日本列島は火山列島。国内のどこにでもマグマは地表近くまで上昇している。公園法など制限はあるが、そのマグマの熱エネルギーを活用すれば、環境は汚染しないし、事故などあつても、周辺にあまり大きな影響を及ぼす事はない。温暖化ガスや、煤煙による大気汚染など皆無に近い。

* * *
②リニア中央新幹線の開通が近い。

1964年の東京オリンピックでは、国力を集めて「新幹線」を開通させた。高速道路も、四方に足を伸ばし始めた頃である。何かの「切っ掛け」があれば、優先的に大事業に取り掛かれる。

今回も2027年開通予定のリニア中央新幹線を一層確実なものとするに違いない。品川・名古屋間286kmを40分で突っ走るといふ。時速500km時代はもうすぐそこまで来ている。実験段階では既にそれを超えた。世界の客を引き寄せる

絶好の機会と捉え、20年のオリンピックまで以前倒し開通できないか…との議論もあるようだが、急いで仕事をし損ずる。私に言わせると、既存の新幹線を、札幌から鹿児島までしつかり「背骨を通す」ことの方が先決であろう（青森→札幌2035年開通予定）。途中で「いや、肋骨が先だ」と上越新幹線を先に着手した時には、青森県の県会議員10名ほどが、集団で自民党を脱退した経緯もある。政治は力学ではなく、道理の筋が明確に通ることが重要である。

* * *

③日本周辺事情

日本周辺が、これ程騒がしく、不愉快な圧迫を、近隣諸国から受けた時代が、今までにあつたらうか。蒙古襲来以来？

【元寇（げんこう）は、1274年と81年の2回にわたり、「元」の軍隊が日本に襲来した事件である。モンゴル帝国第5代皇帝フビライ（ジンギス汗の孫）は、「宋」を併合し、都を大都（北京）に移し、今の中国本土を平定。更に日本へ「入貢」を要請。しかし、時の鎌倉幕府執権北条時宗はそれを断った。するとフビライは大軍で北九州に襲いかかってきた。しかし、いかに蒙古軍は大軍とはいえ、日本中から集まった軍勢には敵わず、3万人も捕虜として失い、ほうほうの体で逃げ帰る時、大風にやられ、大方の船は沈没。大きな痛手を負った。執念に燃える元は、再び范文虎率いる10万の兵を引き連れ、襲撃してきたが、またも大風で元艦の多くは沈没。以来日本では、神の遺徳により起きた「風」として、「神風」と言われるようになった。】

さて、ロシア関係。北方4島がまだ帰らず、

ロシアと平和条約が結ばれない。日本の技術を導入し、シベリア開発などすれば双方大いに潤うと思いが、歴代の双方首脳が、何遍膝つき合わせ話し合っても、さっぱり解決に向かわない。太平洋戦争末期、わずか6日間の参戦で奪い取った諸島である。いい加減譲るべきは譲り合って、明るい未来を築いたらどうだ。お互いに意地と利権が絡み、頑固極まりない。

次は北朝鮮。なんたる国家か？ 3万人の政治犯と300万人の餓死者を出しながら、軍事優先。2300万人の人口で世界第5位の軍隊100万人を擁する。拷問で政治犯は処刑。世界で「一番人権が侵されている国家」と言われる。正式名称は「朝鮮民主主義共和国」。同国の憲法上は、朝鮮半島の正当政府であり、南北合わせた全領土は、北朝鮮のものとされている。

国民は飢えて脱北を図ると、残された家族・親戚など、酷い目に合うという。更に国家自らが麻薬製造、偽札造り、兵器の密輸など。核兵器増産に余念がない。信じられないような不道徳を国家が平気で行う。

そして、韓国を併合するため、韓国人及び多くの国から若者を拉致し、将来のための準備を秘かに進めていた。日本の拉致被害者の家族等、高齢化し、悲痛の叫び声にも、平然として応じようとはしない。日本には、5名ほどを返して、解決済み…として、後の調査さえ、梨のつぶて。

次は韓国。歴史的には日本が朝鮮に攻め入り、多くの苦痛を与えたことは、歴史的事実としてはつきり認めている。確かに従軍慰安婦の問題もあった。しかし1965年に日本は、インフラ整備など多額の援助で、国家賠償及び個人的賠償は完

結という協定を結び、歴史的に解決済みの問題となった。しかし、人情的には、慰安婦の問題など完結とは言い難く、政府賠償ではなく、募金により、償おうとしたが、一部の人はそれを受け取らなかった。そして在米韓国人等は、米国のあちこちに慰安婦の銅像を建立し、米国民の世論に訴えている。その結果、米国会において、日本はこの問題を速やかに解決する義務がある…等の決議がなされたりしている。

最初好日的であった李明博前大統領は、慰安婦問題を日本政府に持ちかけ、それが決裂すると、手の掌を返すように、反日的になり、「竹島上陸」という最悪の事態となった。そして、福島原発事故で汚染水が漏れ出たことを取り上げ、2020年、東京オリンピックが決まるや否や、たちまち福島など8県の水産物に対し、輸入禁止の処置を取った。嫌がらせとしか思えない。栃木・群馬の両県には海がないのに、何たる報いかと、怒り心頭に発している。そして今、日本では放射能を隠すため、「放射能測定」すると、10年の懲役…とのデマが、韓国内で流れているという

更に「日本海」という名称はおかしい。朝鮮半島の東の海なのだから、「東海」と呼ぶのが当然…として今、世界に訴えている。このように、韓国人の反日感情は相当に強く、国も教科書で、日本は、悪の国として国民を教育している。しかし、子供も20歳になると、それはおかしいんじゃないか…と気づくという。日本を訪れた韓国人は、日本人の「おもてなし」や親切さに触れ、大人になれば見直す人は多いという。隣人仲良く…とは真に難しい。

そして中国。まいったね…この国には。

孔孟の仁義礼智の儒教思想で国を治める…とした高邁な理念は、どこへ行ったの？

今、アメリカは中国に、知的財産が年間30兆円も奪われていると怒っている。日本も同様と思われるが、金額は不明。とにかく、まねごと、特許侵害、模造品等、数えきれない乱脈ぶりである。

さて尖閣諸島については、第二次世界大戦で敗北した日本は、サンフランシスコ平和条約（1951年）で海外領土を失い、米国など48カ国が調印し、尖閣を含む沖縄は米国の施政下に置かれた。その後71年に沖縄返還協定で、施政権は日本に戻された。ところが69年、国連の調査で、尖閣付近に石油資源が埋蔵されている事が指摘されると、たちまち中国と台湾が領有権を主張し始めた。この微妙な時期（72年）に日中国交は回復した。78年に日中平和条約調印に当たり鄧小平は、双方この問題（尖閣）には触れないと約束した。周恩来も賠償を放棄し、大同を求め小異を克服すると言った。田中角栄は尖閣諸島について確認を求めたら、周恩来は、今はその問題に触れない方が良くと答えた。これが日中平和条約に至る経緯である。にも拘らず、92年2月、中国は一方的に「領海法」を定め、尖閣諸島を自国の領土として、周辺を「領海」と定め、これを侵すものは「あらゆる措置を取る」として公船を派遣し、毎日パトロールしているのだという。中国は今、「3戦」展開の真っ最中。①自国に有利な情報を流し世論を導く「世論戦」②有利なルールを作る「法律戦」③情報操作や威嚇で相手の意思をくじく「心理戦」である。南沙・中沙・西沙諸島も同じ事。中国は現在、尖閣諸島に関し、「棚上げ」の立場であり、日本は「領

土問題は存在しない」という立場である。

国際司法裁判所がオランダ・ハーグにある。そこへ日本が訴えれば領土問題が存在することを自ら認めた事になる。ならば、中国が提訴すればいいのに、勝てる自信がないから絶対に提訴しない。あくまで二国間協議に持ち込みたいのが真相のようだ。中国の挑発に動揺せず、泰然として構え、但し、不測の事態には、完璧に備える事。

講和条約の時も、米国からの返還時にも、更に日中平和条約調印時にも、尖閣諸島には何一つ触れなかったのに、石油が埋蔵されていると分かる豹変し、一方的に領土宣言したのである。世界第2位の経済大国に成長したというなら、なぜもつと大らかで、世界から尊敬される寛容の精神を持たないのか。そのうち沖縄本島自体、元々中国のものである…と言いつつな気配である。

そして中国では毒餃子事件・人工衛星爆破事件・温暖化ガスの京都議定書に調印しない経緯もあった。そして、PM2.5の大気汚染。サイバー攻撃。沿岸国でもないのに北極航路の開発や、北極海の油田開発権の主張。月面さえも中国に開発の権利があると仰る。尤もノーベル平和賞に対し、犯罪人を表彰する制度など論外…と、まるで相手にしない。常識の通じない国である。

* * *

④日本の食糧自給率39%

これは一体何事だ？

食糧の安全保障。これこそ、政府の最重要課題であろう。食糧の大半を輸入に頼るなど政治がなっていない。地球温暖化のため、食糧輸出国が異常気象で超減産や、輸出国と何らかの事情で仲違いなどあれば、或いは海運テロや日本経済が傾き、

食糧買い付けができなくなったらどうするの？

6割の国民は黙って死んでくれというのか。少なくとも自給率は最低80%を確保すべきだ。8人分を10人で分け合うことは何とか可能だ。日本は農地が無い訳ではない。歪んだ政治がそれを活用できないだけ。平和ボケも甚だしい。これまでなら日本のハイレベル工業製品の輸出で食糧は買えた。しかし後進国に、技術盗用などで、日本のお株が奪われつつある今日、工業製品輸出で食糧買い付けは、すぐ限界に達する。

よまい言ばかり並べたが、数えきれないほど怒りはある。大脳血管が破裂しそうだから、今回はこの辺で止める。

非文明的な文明の話

打田昇三

徳川慶喜が「大政奉還」をした際に幕府を支えていたのは老中の板倉勝静（いたくらつきよ）である。映画でお馴染みの「寅さん」は地方のお寺に転がり込んで坊さんの真似ごとをしていたのだが其処は妹婿の家の菩提寺であって或る日のこと法事で集まった家族親戚と鉢合わせして大騒ぎになる。その町が備中松山藩（岡山県高梁市）五万石の城下、板倉勝静は幕末の藩主である。

板倉氏は清和源氏・足利系を称していて徳川家康に見出され京都所司代として大岡越前守以上の名奉行と称えられた板倉勝重が先祖であるが幕末の藩主・勝静は養子であり、実父は老中主座・將軍補佐役などを勤めた松平定信（徳川八代將軍・吉宗の孫）とされている。大老の井伊直弼が「安政の大

獄」で水戸浪士らを圧迫した際には、寺社奉行であつた板倉勝静が反対したとされ、尊王攘夷派の志士たちには受けが良かったらしい。

板倉一族は幾つかに分かれており日本最初のマラソン競技（遠足とおあし）を実施した上州安中藩・三万石も板倉氏であり此処は新島襄の出身地（藩として知られる。清和源氏との関わりから石岡市に隣接する（元は石岡領？）志筑藩の本堂氏を途中から継いだのも板倉氏である。ただしこちらは兄が幕府の老中か若年寄であり、本来は無役の交代寄合表御礼衆（参勤交代を伴う旗本）なのに兄貴の威光で幕府の役職に就かせて貰ったけれども、国家公務員就職が厳しい時代であつたから余計な金が掛かつた。そのお蔭で板倉氏から藩主を迎えた志筑八千五百石は「日本一の貧乏藩」という素晴らしい評判を得ていた。

金の無い藩は領民から搾るか借金するかしか方法が無いが領民も絞られ続きでは死滅する。此の藩は借金の人人であつたらしい。さすがに殿様を担保には出来ず、戦場で死守しなければならぬ本陣の馬印（纏まとい）まで質草にして借りまくつた。現代の日本は歴代の政治家が大風呂敷をを広げては返す当ても返す気も無い国家の借金を重ねている。幕末の僅か八千五百石の小藩が日本の進路を示したと思えば郷土の誇（埃）になる。

現代は国家財政が逼迫したら税額を上げるといふ奥の手があるから楽なのだが、そういう安易な政治ならば中学生に任せても出来る。「政治」の本来的意味は「国民を大事にする」ことであるから先ず政治家が身を削る対応が無ければならない。取り敢えずは存在の意義が薄い参議院を廃止し衆議院も議員定数を大幅に減らして国会などの在る

土地を売り、原発近くの福島県北茨城に仮設造りの議事堂を建てる。議員やら政府要人が使う車両は軽自動車か人力車にする。近距離は自転車を使う。大臣などの海外出張は減らして用事はメール、ファックス、テレビ電話、郵便などで済ませるようにして、どうしても海外に行きたければ自費で行くか泳いで行く？ぐらゐの覚悟が欲しい。国民に密着した行動もせずに、日本の中心地に居て至れり尽くせりの施設・設備を使い充分な手当を貰い、党利党略に明け暮れる政治屋に庶民の苦勞が分かる筈は無い。ハチャメチャな部分もあつたが、寅さんのように何でも身を以て実践してこそ実情が分かるのである。

脱線して申し訳無かつたが話を戻すと、備中松山藩主・板倉勝静の孫か曾孫に当る板倉勝正という歴史学者が居て平成年代の初期まで「古代オリエント学」という中近東地域の歴史学会で常務理事として活躍されていた。この学会は名誉総裁に三笠宮を推戴していて、三笠宮も自ら中東地域に出かけ「文明のあけぼの」などの著書を出版しておられるし、歴史学会がNHKで講座を開いているからその辺の怪しい宗教団体などではない。

「オリエント」とは大まかに現在の中近東を指すらしい。人類最古の文明は肥沃な三日月地帯で始まった……というのが定説になっているが、その地域はメソポタミアとエジプトであり、勝手に現代の国々に当て嵌めれば、イラン・イラク・シリア・トルコ・レバノン・パレスチナ・イスラエル・ヨルダン、そしてエジプトである。正直に言えば今は安心しては行け無いような国々になる。

それが凡そ五千年ほど前に最初の文明が興つたとされるオリエント世界の中心であり、砂漠地帯

のアラビア半島を取り囲むように広がっている。ただし此の範囲も学者に依つて意見の違いがあるようなので、学者でも研究者でも無い私のような単なるモノ好きは、大雑把に「あの辺？」と覚えて置けば良いのかも知れない。問題は「あの辺」に広がる古代文明の跡が、近頃は紛争、暴動、内戦などの破壊行為と、それに対抗する戦闘で喪失損壊してしまうことである。さらに地域に依つては砲火のみならず毒ガスで住民まで消される。

今は故人になつてしまわれたが、古代オリエント学会常務理事であつた当時の板倉勝正さんが書かれた講座テキストの序文には「古代オリエントとは」として次のように書かれている。

「オリエントとは」 大体、現在の中近東地域を漠然と指す言葉です。ここは凡そ一万年、人類最古の食糧生産（農耕と牧畜）が生まれ、五千年前には最初に『文明』が興つた地域です。文明とは文字の発明、政府の組織、冶金術の開始を言い、これらはほぼ同時に達成されている場合が多いのです……（以下、そのテキストで学んだおぼろげな記憶を辿ってみることにするが、生物学的分野は「ふるさと」風「の同人である菅原茂美さんが御専門なので、或いは私の怪説に誤りがあるかも知れない。その場合はこの原稿のことは忘れて下さい）

先ず、西アジア最古の人類の足跡とされるウベイディア遺跡（イスラエル）は凡そ七十万年ぐらい前のものと考えられており、現在はヨルダン川になっている太古の湖の岸辺で水を飲みに来る象・犀・河馬・野牛・馬などの大型獣を捕獲したらしいのだが、使用した武器は粗末な石（石を打ち欠いて刃状にしただけの礮石）であり、一番古い層から出土したという。それは「オールドワンII期文化」と呼ばれ、アフリカ大陸で発見された石器に似ているの

で礫器文化が原人に依ってアフリカから広がったことを示しているといわれる。

四、五十万年前になるとラタムネ遺跡(シリア北西部)などにハンド・アクス(握り斧)を残した原人が現れる。「アシニール文化」と呼ばれておりフランス北部でも遺跡が発見されている。アフリカを出た原人が各地に広がった足跡であり彼ら(と呼ぶほど親しくはないが)は、キャンプをしながら移動して狩りをしたらしく、生活の跡を示す遺跡から出土した石器も万能化した程度の進化に過ぎないらしい。この頃になると狩りの対象も従来の大型獣が減り、野生馬、野牛などが多くなっている環境がサバンナ化したと考えられる。

これが十万年〜四万年ぐらい前の中期旧石器時代になると、原人では無くネアンデルタール人に代表される旧人の時代になり、石器文化も格段に進歩した：とは言っても石の剥片を利用した鋭い刃物が出来た程度であるが、狩りの対象がフアロ―鹿(タマ鹿)小型の角と毛色に特徴が有る鹿やガゼル(乾燥地帯に適応した小型のカモシカ)などの中型獣になった。鹿類は角が装飾品や道具に利用できるし副葬品として死者に供えられる。其の頃から人類が家族の死を悼み埋葬して花を供えるなど、死後の世界を観念化したと考えられている。(人間らしくなってきたのである)

現世人類と同じ「新人」は三万五千年以前に現れて、石刃技法、小型石器、細石器などの後期旧石器文化を進展させた。従来の哺乳類動物中心の狩猟が変わってきて魚、小鳥、小動物などが被害に遭うようになった。また、大地に生える穀物類が採取されて食料の幅が広がった。フランスの洞窟やスペインで発見された石鏃、石刃などを伴う

「オーリニヤック文化」さらにザグロス山脈地域からイランに至る地域の「ザルジ文化」と呼ばれるものなどが其れである。

新人が残した文化の中で、どちらかと言うとヨーロッパに興ったものが美術的発展をしたのに対して、西アジアでは人類の画期的な生活様式を生み出す準備が進められていたとされる。イギリスの考古学者であるG・チャイルドが「新石器革命」と呼んだ新しい生活様式は、先に私が「あの辺」などと適当に呼んだ地域で約一万年前に始められたのである。丁寧に言うと、その人々はトルコ西部、地中海東岸などで麦・豆類の栽培を開始し、動物では羊類が野生から選り出されて牧畜が始められた。私は羊年であるから言いたくは無いが、羊は単純で知恵の無い動物なので、行った道を必ず戻って来る。それに着目したのが野生の犬であり羊を見送ってから其処に待つていて捕まえた。本来、犬は孤独な動物であり群れては暮らさないが狩りをする時には「猟犬組合」を設立して臨時職員を募集したのである。時給は安く羊肉を少し貰うだけのようであった。人類は其れを利用して犬ごと羊を服従させた。そう言う伝統があるから現代でも庶民の賃金は安いのである。

何十万年という長い年月を過ぎて狩猟採取経済の安定期に入ることが出来た人類は豊富な食料を得ることに依り定住生活が出来るようになった。旧石器時代の終末期を代表する西アジアの「ナトフ文化」に属するアイン・マハラ遺跡(ヨルダン川上流)は、人類最古の村落と言われており五百戸ほどの堅穴式住居と住居の間に置かれた多くの土坑墓が発見されている。其処には集合墓(共同墓地)、再葬墓(頭骨のみ再葬)、幼児の墓などがあり、其の

在り様が西アジアの文化に継承されている。此の遺跡から出土した人面石や装飾的な副葬品からは、人類が祖先崇拜の宗教的感情を萌芽させ始めたこと及び個人的財産の観念が芽生えたことを専門の学者が推定している。

紀元前八千年頃になると「先土器新石器A期」と呼ばれる時代に入る。日干し煉瓦が製造されて壁、城壁、望楼などを備えた要塞化したような集落が出来るが、是は経済を守る防衛的な要因からでは無く、村落を統一する宗教的行事の発生によるものと考えられていて、聖なる泉を祀る祠(ほこら)なども造られる。

遺跡調査などで発掘される場所はどうしても墓地などが多くなるから、是からの記述内容はそういう方向に向いてしまうことを始めにお断りしておいて話を進めると、紀元前六、七千年頃の「先土器新石器B期」になると、先に述べた「二次葬(再葬)」が盛んになりヨルダン川西岸のイエリコ遺跡からは、頭骨に漆喰を使って復元した顔に象嵌(ぞうがんに嵌め込み細工・金銀などを使う)を施すなど、祖先崇拜の観念が強まってきたことが窺える。ヨルダンの首都・アンマンの近郊に在るアインガザル遺跡からは女性の土偶が出土し、墓内には百余りの漆喰製人物像・動物像、そして工具(石の剥片)などが置かれていた。この頃に儀式として死体に加工したりすることが行われ「神に捧げる犠牲」「生命を司る神」の概念が生じたものと思われる。人類が定住する村落を形成したのは七千年ほど前と推定されているが、遺跡として現代まで残されているのは「テル」と呼ばれる洞窟や岩陰などに残された集落の跡である。テルはアラビア語らしいが、テペル・ペルシア語、ホユックトルコ語

も同じである。二〇〇七年に筑波大学の研究チームがシリア北西部の発掘調査で四十体の人骨や首飾りを見つけたテル・エル・ケルク遺跡の墓地も八千五百年前の世界最古級のものとされている。其の場所は新石器時代の集落跡と推定された。

獲物は変わっても、野生動物と一緒に暮らしていた人類が食糧生産を覚え、文字を創りだして統制社会を構成するようになったのが凡そ五千年前である。それを顕著に証明するのが「歴史時代」であり、紀元前三千年頃にエジプト文明、メソポタミア文明が起り、五百年ほど遅れてインダス文明が、さらにエーゲ文明、殷（黄河）文明が興った。ただしインダス文明の文字とエーゲ文明の絵文字は未だに解読されていない。

西暦二〇〇〇年に、NHKが放送七十五周年記念事業として東京と横浜で「世界四大文明展」を開いた。NHKホールで三笠宮の特別講演がありエジプト学の吉村先生、西アジア研究の後藤先生ほか四大文明研究の第一人者がパネリストになるフォーラムが開かれ、私も良い席で拝聴することが出来た。文明展そのものは上野ニカ所、世田谷、横浜に分かれて開かれたので上野でエジプト展だけ見て、会場で四大文明の分厚い本を購入して帰って来た。其の時にメソポタミア展会場の世田谷美術館に「動物や植物と幾何学的装飾のある大鉢」と名付けられた壺が展示されており、購入した本に写真が載っていたのである。

その壺はルーブル美術館の展示品で直径四十七センチ弱、高さ三十センチの約六千年前に作られたものと説明されていたが一部に欠損がある。出土地は「テペ・シアルク遺跡」イラン中央部の都市カーシャー市郊外にあるエラム文明（地域化したメ

ソポタミア文明）の遺跡である。

この話は「ふるさと」風」の二十号でも触れたのだが私は其の壺の欠損部分（欠片）を持っている。テペ・シアルク遺跡を実際に訪れた際に現地の警察官が「勝手に入って見ろ！」というので遺跡内の洞窟内部で見つけお土産に拾ってきた。文明展で買ったカタログの写真と照合したところ欠損部分の絵と拾って来た欠片が一致するから、世田谷会場に写真を送って「欠片を提供しても良い」と申し入れた。ところが数日後に電話があり「要らない」と言われた。本物の研究者ならば実物と照合して見るぐらいの探究心があるべきで頭から信用していない。断って来たのはアルバイトの学生でもあったのか：結局、ルーブル美術館の展示品は欠損部分が有るのに粘土で塞いだ俣で永久に展示されることになった。一般の人々の古代文明に対する関心は、その程度なのであろう。

話を逸らしてしまったが、そのテペ・シアルクと同じ頃の時代にトルコ中部に発達していて紀元前六千五百年以降に於ける西アジア最大の村落遺跡と言われるチャタル・ホユックでは、麦類栽培のほか牛を中心とした経済が繁栄しており密集家屋が建てられていた。此処の出土品は豊饒・再生の地母神像や壁画、彫刻、副葬品、祠など宗教色の顕著なものが多い。それらは宗教的権威者か家長と思われる者の墳墓に集中している。しかし階層の分化は行われておらず「古代オリエント学」では「都市文明への発展に続かなかった」としている。此の遺跡に残る集落が衰退した後は、ごく普通の規模の村落しか残らなかったのである。しかし此の時代には灌漑農耕が行われて小麦や裸麦が栽培されていた。パンに類するものが食べられ

ていたかも知れない。

紀元前六千年頃の土器を伴った後期新石器時代つまりメソポタミア北部を中心に展開したハッスナ文化に代表される土器・新石器文化（壺の話に触れたテペ・シアルク遺跡が是に相当する）の時代に入ると、自給自足的な社会から発展して地域的に広がった経済社会が成立する。都市が発達して人口が増加した。此の為に死者を埋葬する大規模な共同墓地が出現する。メソポタミア中部に興った後期サマツラ文化のテル・エス・サワン遺跡からは一軒の家の床下から百三十もの墓が見つかった例もある。尤も大部分が子供の墓とされるから乳幼児・児童の死亡率がかなり高かったのであろう。何の意味があるのか、死体には赤土が振りかけられており、多数のアラバスター（雪花石膏）製の容器や眼に貝の象嵌が施された女性立像などが副葬されていた。これらの女性像は後世に続くメソポタミア南部の伝統的人間像の先駆形態と言われている。

紀元前二千八百年頃になるとメソポタミア南部にはキシユ、ウルなどの人類最初の高度な都市国家が出現する。メソポタミア文明を基礎づけた民族とされるシュメール人によるものである。シュメール人については分からないことが多いと言われるが、鼻が高く（大きく）、ズングリ体系で言語が日本語・トルコ語・朝鮮語に似ているというから、まんざら異民族とも思えない。シュメール人はエリドウ、ウルク、ウル、ニップルなどの都市国家を築き、主に商取引の記録であったらしいが粘土板に楔形文字を残し、それが古代オリエントの歴史を後世に伝える役目をした。

然しながら此の民族は統一国家を創れず、紀元前二千四百年頃に、砂漠の遊牧民族であったと思

われるセム語族系・アツカド人のサルゴン王によるメソポタミア南部の統一がなされる。此の国家も百五十年ほどで滅び以後のメソポタミアは紀元前五百年代に、ペルシアのアケメネス王朝がイランから小アジアに至る地域を支配するまで諸王朝、諸帝国が興亡を繰り返すことになる。

シユメール人が文字を残して居なければオリエントの歴史は推測するしか無かった。伝説・伝承も然りである。日本では架空の人物だが寅さんが各地に物語を残した。物語は現地に密着して歴史として残る。永遠に続く人間の歴史は、それが事実であっても、語り伝えられなければ消滅する…。「ふるさと」「風」の会は書き続ける。

事故は無くなるのか

木村 進

さて、最近の事故ニュースでは「北海道の貨物列車脱線事故がある。そして事故直後の北海道の説明が波紋を投げかけている。

レールは常に列車の遠心力などや重力の力ではばが広がってしまうそうだ。そこでこのレールの間隔を定期的に測って、基準値を超えたら保安作業員がこの修正をしなければならぬ事になっていた。これがルールだった。

この基準値を超えた箇所は当然修正しなければならぬはずであるが、優先順位をつけて作業をしているうちに「失念してしまった」のだそうだ。

この失念と言う言葉にメディアはこぞって反応し、体質がうんぬん…と紹介し、コメンテーターがいる

いろとしゃべっている。

北海道と言う過酷で利益が生み出せない鉄道事業を民営化したことの弊害が出たとも。

それにしても、テレビなどでは、またかと思う反応に「さきさきうんざりさせられることが多い。」

「失念などとはたるんでいいる。人の安全を何だと思っているのかと…。教育ができていない。ベテランがいなくなつて今まで守れてきた安全を維持する技や心が伝承されず、狂つてきた。」などだ。

これつてどこか柔道の体罰問題とも似ている気がする。過去の日本人は優秀だったし、規律もしっかりしていたと…。

たしかに、これは一理あるし正しいようにも思える。でも精神論で事故が減るなんて本当に思っているのかと…。

「日本の技術は優秀で、それを守る匠がいて数値などでは測れない技量がある」といわれる。

これは確かに存在するし、この長年の技や勘のよいうなものが親方から弟子に伝えられて伝統が守られてきたことを否定するつもりはない。

しかし人間は弱いものである。ミスは起こるものである。そんな匠と呼ばれる人が何処にでもいるわけではない。世の中が豊かに平準化してくれば、どんどんそのような匠と呼ばれる人は減つてきて、人為的な不祥事や事故が増えてくる。そんな時代にどうしたら今後同じようなミスが無くなるのか。

当然精神論やTOPの首を替えただけで無くなるものではない。この辺りは欧米の考え方も学ぶべきだと思ふ。

日本人は勤勉で何でもまじめにやるが、精神論やマニュアル化したり、指差し呼称したりするだけ

では事故は無くならない。

原発の事故でも実は同じような不安をおぼえる。安全神話により、事故は起こらないとして、自分たちの都合で最悪を考えないようになってきた。

これが今度の事故で崩れたら、今度は厳格な基準を造つてそれに合致したものは安全だと…。

これではまた事故は起こりうる。起きた時のリスク対応が希薄になる。政府の原発事故調査委員会に失敗学の権威をあてた。そして報告書が作成され、去年の7月にその最終報告書がまとめられた。全部は読んでいないが、確かに立派な報告書なのだろうが、どこか物足りなさを感じてしまった。

最後に委員長の所感が載っている。そこに書かれていた項目だけを以下に列挙してみた。

- (1) あり得ることは起こる。あり得ないと思ふことも起こる。
- (2) 見たくないものは見えない。見たいものが見える。
- (3) 可能な限りの想定と十分な準備をする。
- (4) 形を作っただけでは機能しない。仕組みは作れるが、目的は共有されない。
- (5) 全ては変わるのであり、変化に柔軟に対応する。
- (6) 危険の存在を認め、危険に正対して議論できる文化を作る。
- (7) 自分の目で見て自分の頭で考え、判断・行動することが重要であることを認識し、そのような能力を涵養することが重要である。

これは確かに「失敗学」のいう「失敗から学び」、

「改善して良くしていこう」と言う考え方に沿ったものだろう。本当にこれでいいのか。原発事故などは二度とあってはならない。絶対に！

安全解析の手法は実は「FTA, FMEA など」が欧米では中心となっている。

これはこれが故障したらどうなるかをシミュレーションして、限りなく事故を減らし、事故が起こった時の影響を最小限にすることを目指した手法である。

事故が起こる確率を限りなく0に減らすという考えは日本の風土にはどうもなかなか受け入れられないのかもしれない。

失敗が起こったらどうしようもなく、事故事例もほとんどないのだから、使われている機器一つごとの信頼性や、仕組みが安全に対してどれだけのリスクがあるかを徹底的に検証すべきなのだ。

そしてそれを絶えず検証してチェックしていくことが必要だ。そして不安の残るところは二重三重の安全装置（計器や機器の二重化・三重化）をするべきなのだ。しかし、このような事はあまり書かれていない。冷却が生命線なら、電源装置を高台にもつていくだけではなく、別の系統も考慮すべきで、水冷と空冷装置などの別々な要素を組み合わせなければならぬ。計器だって誤作動があるし故障もある。でも同時に起こる確率は少ないから同じものを3個つけて2つが同時に作動すればその事象が正しいと判断する。これで確率的にはかなり正確になる。

鉄道の脱線事故は、どちらかと言うとこの話とは

違って、マニュアルはあるのに守られなかったのだから、これを人間の失念などに起因しないような仕組みに変更すればいいことだ。

失念しても必ず責任者の所にアラームが出るようにすればいいことで、何故これが人間の考え方がたるんでいたからというようになるのだろうか？自動的に記録することができないならば、測定と記録は人間が行うのだろう。そのためのチェック機能を何らかの方法で行い、記録したら処理が完了して処置終了となる。これには当然検査も別な人間が行うことが必要になる。

一年間も放置しても問題が現われないなどと言うことがない仕組み作りが大切だ。

これは精神論ではない。問題を放置しても平気だった体質が問題なのは確かだが、それよりも問題が問題として認識されない仕組みを直さなければまた起こる。

失念していたのは誰なのか？ 担当者であろうか？ この失念などと言う言葉も場当たりの使っているにすぎないだろう。

日本は中国や韓国の事を笑っているようだが、まだまだ笑う資格もないお寒い国かもしれない。

もう何十年前前に品質の国際基準として ISO9001 がヨーロッパから始まった頃、日本ではこの考え方が定着していなかった。

私も海外からこの規格を持っているかと問われて、最初のうちは「品質は日本のお家芸で、アメリカやヨーロッパは品質が落ちるからこんな考え方を導入して世界に広めようとしている」と本気で思っていた。

しかし、日本の製品が優秀で品質管理もしっかりしていると胡坐をかいているとこの合理的な考え

方にそのうちに抜かれてしまいかもしれないと感じる様になった。

まだ日本の JIS に規定が制定される前のことだ。PDCA (Plan-Do-Check-Act) サイクルをまわして改善を継続していくというのは理にかなったやり方で、これからの日本には必要なのである。

この合理性と日本の匠の技・勤勉性が組み合わせられればこれからも日本は技術立国でやっていけるだろう。

夷の宮から鉾の宮へ

伊東弓子

玉里御留川を歩く会第二回を迎えたのは、夏に向かう六月十五日（土）だった。例年だと梅雨に入る時期だが、暑さが先に来ているので心が重かったが、当日は雲が多く「この分なら」と気楽な出発になった。夷の宮前の駐車場の腰の痛い人、歩くのが辛い人に借りておいた。たとえ一人でも利用してくれた事はよかった。

夷の森は松の大木が鬱蒼として松風は止む事になかったと言う。終戦後配給所だったお宅と「えびす商店」と呼んでいた雑貨屋の傍に古い通りがある。店はお酒を売っていたので一杯飲みに来る地元の客もいたが、この頃は足も絶えて店も閉めた。踊りの姿も、カラオケの声も聞えない、御留川象徴の鳥居もその影を映す水面も大部分なくなつて、更に以前の神事の祠りも大綱を引く男達の禪姿も時の流れに消えていった。野良の帰り野具や汚れた手足を洗った水も堤防に遮られてしまった。夜遊びに行く舟を繋いでおいた声もコンクリ

ートに潰されてしまった。

歩き出して間もなく下高崎舟溜りがある。久しく乗っていない舟が十艘位ある。釣り人の姿はあっても舟の出入りしている様子はない。枯枝、枯草、その他現代塵が漂っている。堤防内側に下高崎排水樋門がある。

塩くら。 玉里御留川の一つ。(絵図で五番) この漁場はどの辺だったのだろうか。

水産業の大きな問屋がある。下高崎では処所一軒になってしまった。扱っている魚はこの湖の物ではないらしい。紺屋に続いてうなぎ屋がある。板塀の回った大屋敷だ。南から西側の板塀の外通りは細く、下の田が深く見えたのは子供の頃だ。堤防から真直の道は当時捕れたうなぎを運ぶ道じやなかったかなと考えたりしてみた。道が突き当たった所は神輿が置かれた所、其所を右へ行くと神田坂に行ったり、地藏堂へ行ける。堤防工事で土を盛って行く時水際から数多く蛇が出て来たそう。

赤坂川。 玉里御留川の一つ。(絵図で四番) この漁場はどの辺りなのだろうか。

一面蓮田の中に高崎地区の集落センターがある。江間を埋め立ててコンクリートで敷きつめられた場所となった。真直ぐ行くと、石祠がある。近くに、昔風呂屋があったとか。左には祭りの時の幟を建てた所も伝えられている。すぐ近くに共同墓地がある。其処には寺があって寺子屋で勉強したという話もある。一角に筆塚もあった。寺の跡は小さなお堂に忍ばれるが後は竹、篠が生い茂っている。部落の人達が掃除してくれるといいと願っている。「私も手伝うよ」という思いを暖めている。空寺になって久しい頃、乞食坊主が部落に物乞

いにやって来たという。部落の人等は相談の上、此処に住んでいい、その代り外から来た怪しい奴を追い払ってくれと頼んだそうだ。結構役に立った坊主だったという。

一緒に歩いていた一人が江間のある頃は水はきれいで水底には小石、魚の泳ぐのも見たという。石岡紅葉線の県道は急カーブになっている。六十年位前大きな事故で二人の青年団リーダーが亡くなった。三十二年前は、お婆さんと孫が亡くなった恐ろしい道。ここにきてやつと歩道が出来る

とのことで測量などしているが、五年は掛るらしい。出来上る迄事故のない事を願う許りだ。川魚の加工をしていた店もやめた。八坂神社は上、下高崎の境にある。反対側に老人ホームがある。広い場所だが利用者の姿は見る事は殆どない。一生部屋の中だけで暮らす事になるのか等思ったりしながら、歩は続く。施設の西すぐ近くに大きな柳の木がある。田と霞ヶ浦の水境には必ず見られた木だ。大雨でその境を越え田を嘗めつくして道路迄来た事もあったそうだ。柳の傍に上高崎舟溜りがある。堤防の外側に上高崎舟溜りがある。堤防の外側に上高崎舟溜り樋門がある。

からたち。 玉里御留川の一つ。(絵図で三番) この漁場はどこにあったのだろうか。

高崎に七々八軒あった地域商店は一つだけになってしまった。老人にとつては有難い場所だ。その近くに高崎では一番緩やかな坂がある。左側の屋敷の間の田の中に弁天様が祭られている。上高崎に嫁に来た人は必ず此所へお参りしたと言われている。昭和四十五年に嫁に来た友はやはりお参りに行ったという。いつも手入れされている。下川岸、中川岸、上川岸とよぶ三川岸は、水上交通

時代には栄えた所だろう。その行き来の中で職種も多く文化も幅広く入って来た豊かさも持っている地域だ。

小宮川。 玉里御留川の一つ。(絵図で二番) 宮という字もつくので銚の宮近くと考えられるが、此所とはつきりもいえない。

二十名はそれぞれ四々五人の固まりとなって歩いていた。今回は地元の女性が多かった。親や姑さんに聞いた話しに花が咲いていた。だんだん汗ばんで来た。話しより口から出て来るのは「暑いね。暑いよ」が多くなった。舟大工だったという家から、府中の江島という人が出した江島川岸の名の残る江島川岸上高崎排水樋門、上高崎機場を左に見て曲った。水神石祠を田の畔に見て左側に江間の跡を目にした。江間入口と湖の境あたりに建っていた鳥居の欠片が横たわっているから、何とか整理して屋根を被せて風雨から守るようにして欲しい。私が暖めている二つめのものだ。

銚の宮。 山際の細い道を行くと銚の宮(古宮、ホコノ宮)があったと思われる所に着いた。石佛が沢山ある。ついこの間迄集会所があったが壊した。新しくしたい要望もあるが道幅が狭く消防自動車が入れないのもう七々八年にもなるが未だに実現していない様だ。玉里御留川の調査中もリーダー達が、古地図を調べ、古文書も調べ、国土地理院迄も足を運んだが納得出来る資料は見つからなかった。「ここだろう」という「？」付きで止めた事になっていた。此所から向こう岸の境堂をみてみた。今ある家々は当時はなくよく見えたのだろう。

帰りは宿添いに行けば角度をかえて新たな発見もあるが、歩道がなく大勢で歩くには危険なの

で来た道を戻る事にした。

境堂が昔は遠くに見えたのだろう。今は人家や木立の影になっている。JA 三村、関川の建物を目安にすればいいと説明した。

コンクリートの跳ね返りの暑さの上を戻った。解散と同時に帰る人は颯々と引いてしまった。お昼を広げている人達には夏の木立が大きな陰を作っている下でゆつくりした。地元に住んでいても堤防へも来た事がなかった。今日はよかったですと語り合い、塵が多いのに驚いた。皆で塵拾いするのもいいねと声が出た。実現する事を願おう。子供二人を入れて十九人の参加だった。

第三回の呼びかけをした。一、二回めの参加者に声かけて夏の宵の集いにしたかったが計画が悪かった為だろう大人三人、子供二人の参加だった。夜風に当りながら世間話に花が咲いていたが「こんな時間に集まってくるのは後家ばかりか」と淋しい笑いで終わった。湖の水は臭くもなく静かだった。花火の灯りに、この「深壺」の呪わしい話を思い出していた。人数より続けていく事が大事だ、と負け惜しみで一人納得した夜だった。

四、五日前地元の女の人に久しぶりに合った。近寄ってきて「ああ、今日は合えてよかった。何回もお知らせを頂いても参加もしなかった。かといって電話をかけるのも言い訳がましいし、いつか合ったら話そうと思っていたので、今日は本当によかった」として続けた。「私に知らせをくれたというそのことが嬉しかった。読んでみると今迄全く知らなかった事を教えてくれた事が嬉しかった。会って話すことが気持ち伝わると思ったので、本当にお礼が遅れてご免ね」という言葉からはお世辞でも繕いでもないことがわかる。私は

この人と話しをした中で勇気を貰った。百人に知らせをし返事がなくとも、直ぐに反応がなくとも、心にとめてくれた人がいた事、喜んでくれたこの人が背中を押してくれるだろう。これが地域で行う大きな意味だと確信した。

大小路町の桃太郎さま

兼平智恵子

恒例の石岡のおまつりの準備は、おまつりが終わった次の日から来年のおまつりの準備に入ると言われています。特に石岡市街地、年番町内の皆さんは思いを寄せ、待ち焦がれて一年を過ごす聞きます。

今月の山車の上に乗る人形のご紹介は大小路町の桃太郎さまです。

大小路という地名は国府（六四六年常陸国が誕生し、ここ石岡に国府が置かれたのあった土地に多く見られ、国府の街を縦横に走る大路、小路に因んだと言う一説もあるそうです。石岡の大小路は小字名で、明治初期までは田畑が大半を占めていました。明治二十八年常磐線が開通し、石岡駅が出来たことにより街が広がり石岡の玄関口として次第に栄え、いくつもの運送店や、繭市場等が活気を生み出していました。

石岡駅を出て右に折れ、現在の石岡郵便局駐車場の西に向かう道路（商工会議所前を過ぎ香丸町通りに交差する道）は、かつて、大小路新道と呼ばれた通りです。昭和四年十月には石岡駅から真西に伸びる通称「八間道路」御幸通りが完成し、市街は駅を中心に発展しました。昭和三十年を過ぎると大

小路町は駅前の中心商業地となり、地名に残る古代のイメージと昭和期の発展の横顔をあわせ持つ町となりました。現在の地名は府中一丁目、国府一丁目となっており、大小路新道と御幸通りの間に広がる、「家具の今泉」あたりまでの町並で、三十世帯余りの町内になっています。

今回は、お綾麗工房おかだ様よりご紹介頂いた吉川様を尋ねました。生憎ご主人様は留守で若主人様が熱心に調べて下さいましたが、町内で知っている人がいないとの事でした。とりあえず山車をお見せしようと言う事になりました。

一週間後、若松町にある大小路の山車小屋に伺いました。大小路町からはおおよそ一・五キロも離れているところでした。この山車は平成三年に新調され彫刻も桃太郎の鬼退治の物語が見事に刻まれてありました。今まで使用していた山車は柿岡の祭りで活躍しているとの事でした。桃太郎さまは納められており、お姿は拝見出来ませんでした。

この桃太郎さまは、以前、当会報八十一号で國分町の仁徳天皇さまの時に一緒にご紹介した人形で、昭和四年國分町の年番の時、國分町の代表の方と東京都浅草区茅町（現在の住所は台東区柳橋一丁目の江戸型山車職人「浪花屋」庄田七郎兵衛氏を尋ね、作成されていた二体のうちの一体で、常陸國分僧寺の遺構が保存されている歴史のある國分町には仁徳天皇さまが、新しく開かれた大小路町には桃太郎さまが与えられました。

桃の中から生まれた桃太郎が、犬、猿、雉を連れて鬼ヶ島の鬼を退治すると言う話で、これは室町時代の成立で時代色を反映し、忠孝勇武の行いをほめたたたえたもので、この桃太郎さまにかけ、

大小路町の皆さんの熱い思いが、新調された山車を拝見して感じられました。

山車に墨書されているところを列記します。
平成三年九月八日完成

大小路町山車建造特別委員会

製造者 (株) 山崎工務店、(有) 羽成製作所

棟梁 村田輝夫

彫り物 井波彫刻協同組合

鍔金物 高岡市 安川弥吉

緞帳 大和田洋服店

寄付者二十九名

桃太郎さま一色になっていました。

ご紹介下さいましたおかげ様、お忙しい中ご案内下さいました吉川様誠に有り難うございました。

(参考資料 いしおか一〇〇物語)

・風のオーケストラ

ススキ舞いコスモス歌う

智恵子

【特別企画】

虚構と真実の谷間

第六章 功績の値打ち (4)

打田昇三

ここで当時の官職について大まかな説明をしないと、平貞盛や繁盛の努力が良く理解されないと、横道に逸れるが平家の番頭に替わって思っていることに置く。ごく大雑把には歴史物

に出てくる官職名は文武天皇の大寶元年(七〇一)に制定された「大寶律令(たいほうりつりょう)」に依っている。それが修正されたりしながら平安時代に定着し、武家時代には独特の制度も出来たけれども、名前とか肩書きのような形で江戸時代まで残っている。例えば殿様が〇〇守と言ったり忠臣蔵でも大石内蔵助(くらのすけ)とか吉良上野介(こうずけのすけ)、浅野内匠頭(たくみのかみ)などが出てくる。位階で言えば、内匠頭は従五位上相当、内蔵助も上野介も正六位下である。

官僚の場合は国(中央、地方(諸国)ともに四部官と言って「長官」「次官」「判官」「主典」に分けられ、長官は役所を統率し、次官は補佐し、判官は役所内を監察して書類を審査、主典は事務を行い書類を作り公用文を読む。現代のように誰でも読み書きが出来る訳ではなかった。その他大勢が下級役人としてコキ使われていたのである。

四部官は役所に依って違うから例えば同じ「判官」でも太政官なら従五位の少納言、檢非違使ならば六位の尉官、そして地方国府の場合は掾(じょう)が充てられたから正七位下から従八位下までの者である。六十何か国かのうち、大和、伊勢、武蔵、上総、常陸など十三か国は大国に区分されたから特に大掾(たいじょう)が置かれていた。

大掾の位階は、中央だと三衛府の下士官に相当する低い地位であるが、地方では「井の中の蛙」で権限を行使できたから威張っていたのである。石岡では「大掾氏、大掾氏！」と自慢げに言う方も居られるが、例えば国分寺の鐘を借りて返さなかった罰で断絶した府中藩主・皆川氏も家系は下野国の大掾職である。

繰り返すようであるが平将門に攻められて焼か

れたという過去を持つ石岡では、何かと言うと将門に討たれた平国香を歴史の頂点に据えたがる。将門追討に活躍したのは国香の子である貞盛と繁盛の兄弟であるから、その父親が褒められるのも分かるが、歴史は何かを仕出かして幾らの世界だと認識しているから、どう考えても若死にした弟(平良将)一家の土地を長老の権限で侵食したり源護と組んで将門に喧嘩を吹きかけて、その挙句に逆にやられた国香を崇拜する根拠が無い。吉川英治さんの小説「平の将門」にも平国香は意地悪爺さんとして登場する。個人的な意見だが、誤まつた平国香崇拜思想に隠れて、平繁盛の影が薄いのはなかるうかと思っている。

とにかく「新編常陸国誌」などにも平繁盛に関する伝説も言い伝えも無いのであるから不思議であるが、幸いにして既に述べたように平氏政権下に於ける北陸の勇者として活躍した城一族に桓武平氏の面影を見ることが出来て、板額オバさんの活躍で「負け組」万骨グループながら一つの歴史を後世に残すことが出来た。城氏の始祖は、貞盛の十五番目の子(養子)となり余五將軍と呼ばれた平維茂とされており、維茂は繁盛の子である。この稿の目的は、平将門を討ち天慶の乱を鎮めた平貞盛の功績に隠れて、その後が分からない平繁盛の記録を探ることであるが、諦めるしかない。

しかしながら繁盛の子孫については城氏の他に幾つかの家系が伝えられているので、その辺りを探ってお茶を濁そうと思う。地元の常陸国に残った大掾氏については早い時期に本流が潰されておりに後を継いだ支流の吉田系・馬場氏にも景気の良い話が無いので省略する。

先に触れたように平繁盛の子の平維茂は東北地

方で大きな合戦をしている。時代を平将門の死から五十年ほど経った頃に移して、当時は藤原道長が徐々に権力を握り始めた時期であり紫式部は夢多き少女として文学に目覚め始めていた。当時の天皇は後に紫式部も仕えた一条天皇である。或る日、宮殿内で二人の公家が些細なことから口論を始めた。左近衛中将（さこんえのちゆうじょう）の藤原実方と、左兵衛権佐（さひょうえんのすけ）の藤原行成で共に天皇を守護する武官のトップクラスではあるが生まれながらの官僚である。藤原実方が藤原行成の冠をむしり取って庭に捨て憤然として席を立ってしまった。行成は「ひどいことをする方だな」と呟きながらも、何事も無かったように冠を拾うために主殿司（ものつかさ）という下級官僚を呼び寄せた。平家物語の有名な場面で、平忠盛が銀紙を巻いた木刀を主殿司に預けるけれども、殿中では帽子一つも勝手に拾うことが出来ない——意味の無い形式にこだわる無駄な人件費を増やす良い制度があった。

この一部始終を、当然だが一条天皇が御簾（みす）の向こうからご覧になって二人を呼び出し、他人の冠を粗末にした藤原実方には「貴族としては優雅な精神に欠ける：自然の豊かな地方で和歌の勉強でもしてきなさい」と東北勤務を命じた。

高官であるからナンバーワンの陸奥守になった。藤原行成は冠を飛ばされただけの被害で、蔵人頭（くらうどのとう）と言う侍従長に抜擢された。

天皇には嫌われたけれども、公家同志の喧嘩で実力行使をした藤原実方は陸奥国府に赴任した途端に回りに勤務する下役の武士たちには大歓迎をされた。ナマチヨロイ公家と違ってトラブルを実力で解決しようとした姿勢が武士に評価されたの

である。当時の武士団は、文字通り武力で問題を解決するのが身上であったから、前後の見境も無く合戦に明け暮れているようなところがあつたらしく、そういう形を造り出したのが平将門であると思われるらしい。

さて左遷されてきた藤原実方を歓迎した武士団の中にいたのが、平繁盛の子で伯父・貞盛の養子になった余五將軍・平維茂であり、役職は分からないが陸奥国府勤務を命じられて多賀城近辺に居たのである。同じ頃に、貞盛と共に将門追討に当たった藤原秀郷の孫に当たる藤原諸任（もろとう）が澤勝（さわまた）四郎と名乗って土着していた。この二人が領地の境界のことで争い、国主の藤原実方に訴えたのだが公家仲間の冠ぐらいは飛ばせても、武士の領地争いは難しい。然も両名ともに武士として営業届を出して居る人物であるから、裁定に不服があれば何を仕出かさか分からない。その中に国司の藤原実方は病気で死んでしまい、裁定も下りない俣であったから両者が疑心暗鬼となり、他人の無責任な噂も広がって合戦は避けられない状況になってきた。

両者が宣戦布告の証書を交換し日時・戦場を定めて合戦することになったのだが、澤勝四郎側は約千人の兵しか集まらず、平維茂には三千の軍が有った。この状況を知った澤勝四郎は土壇場になってキャンセルを申し入れ、常陸国へ戻ってしまったのである。この知らせを受けた維茂は暫くは警戒していたが「澤勝の君は無益な戦いは好まないお方だ：」などという話も聞こえてきたので、平将門の場合と同じように多くの兵を帰郷させてしまった。ところが、これは敵方の卑怯な作戦で平維茂の館に残る兵が少なくなったところへ澤勝

四郎の軍勢が押し寄せて来たのである。

この状況を察した維茂はいち早く妻子を裏山に避難させ自分の兵力を確認したが数えるほどしか居ない。館に立て籠って矢戦さになった。すると敵側は建造物ごとに火を付けて回り、焼き殺す作戦に出た。出れば射られ、籠れば焼かれる。こうして平維茂は滅ぼされてしまった：のでは後の歴史が続かない：建造物が全焼して、敵側が焼け跡を確認すると残酷にも子供を含めて八十余人の遺体があつた。維茂も自分の妻子しか避難させなかったのである。「一將功成り：」の場合だけでなく「一將も身を隠す」危急の場合でも、下層階級の者は真つ先に犠牲になる。攻撃軍は、それが維茂の焼死体か分からぬ俣に満足して引き上げた。

敵將の澤勝四郎は途中で少し離れた場所に在る妻の実家に寄った。主は名を大君と言い、かつて能登の国主を務めた藤原某の子で妹が澤勝四郎に嫁していた。勝ち誇って帰還してきた四郎に、大君は「平維茂の首を確認したのか？」と聞いたが、四郎は「全員が焼けて分別が付かず、たとい維茂が首と分かっても、何で焼け首を持って来る必要があるのか？」と取り合わない。是を聞いた大君は「相手が豪の者なれば焼けても生き返ると思うぐらいでなければ勝てぬ：」と呟いて軍勢に館から離れるように要求した。四郎は老人の要らぬ心配と苦笑をして離れた場所に軍を移した。大君は其の場所へ酒や食べ物運ばせたので、一同は満腹になりぐつすりと寝込んでしまった。

その頃、敵の襲撃を知って三々五々に駆け付けた維茂の家来たちは、焼け跡を見て愕然としていたけれども、その一同の前に、館の裏にあつた沼のほうから全身が燻つてはいたが無事な維茂が、

よろよろと現れた。合戦で矢が尽きた後に、女物の衣装を着け髪を乱して敵の目を避け、沼に潜んでいたという。やがて集まった百騎程の軍勢を纏めた平維茂は、酔い潰れている澤勝四郎の陣営を急襲して是を全滅させ、さらに澤勝の館を襲って四郎の妻と付添の女一人を捉えた。その後で館には規則通り火が放たれた。捕らわれた二人の女性は大君の許に送り届けられた。大君は維茂に感謝し、それに比べて劣る義弟・澤勝四郎の武士としての行動を浅はかなものと非難したという。

この事件により余五將軍平維茂の勇名は日本中に知れ渡ったのであるが、この時代の武士が何かあれば合戦に及ぶ。そのことが特に非難された訳でも罰せられた訳でも無い。平将門は、そういう武士の行動を先取りしたのである。ただ将門の場合には行きがかり上で常陸国府などを襲撃したことにより国家権力への反逆とされてしまった。繰り返すようであるが、将門が結果的に平国香を死なせてしまったことは、飽く迄も個人的な争いの結果であり喧嘩両成敗に該当する。平維茂が北陸へ行くのは澤勝四郎を討ち取った事件の後かと思われる。父親の平繁盛は常陸国で隠居して、多分、其の頃には既に他界していたのであろうけれども墓所は何処か分からない。

整理すると平繁盛の子は数人居て、先ず平維茂は余五將軍として名を成し、死後も「万骨」にされないようにしてから北陸に行つて城氏に子孫を伝えた。平維幹は伯父の養子格として常陸国の広大な領土を相続して大掾氏となった。この系統の最後は鎌倉時代の歴史の流れの中で「万骨組」に引き摺り込まれるけれども有名な曾我兄弟の仇討事件に絡むから世間には知られている。源頼朝に

胡麻を摺った効果で潰れた大掾本流の跡目を継がせて貰ったのが吉田系馬場氏であり、平繁盛の子孫には違い無いが末流過ぎて先細りで戦国時代に石岡で滅びる。兼忠という人物は名前が分かっているだけである。そしてもう一人、安忠と言う人物が居てこの系統が長く続くことになるらしい。

或る国文学誌の対談で司馬遼太郎さんが面白いことを言っておられた。平安時代末期頃から各地を開発して勢力を保つた地主(中小武士団)は、実力はあるが権威が欲しくて中央貴族の血を引くという系図を作り始めた。その為には公家に繋がりをつけなくてはならない。そこで公家と武家との間に「談合屋」のような存在が必要になってきた。

最初に「談合屋」を開いたのは源義朝(頼朝の父)であつたが、続いて開業したのが平清盛である。この談合屋は現代で言えば大臣の所へ何か訴えに行くときに、その系列下の下っ端議員に頼むような形である。談合屋は偉い公家の所へチョロチョロ出入りして、その公家から軍隊で言えれば下士官程度の官位を貰う。それが地方の武士には顔が利くことになり、源平両氏による系列化が進んだ。表現は違ふが、その様な趣旨のお話であつた。言い得て妙、実に痛快で素晴らしい歴史表現であると私は思っている。

平清盛と源頼朝は商売がら、その原理を上手く使つて天下をモノにしたのであろうか。大雑把に言えばこの二人に「国づくり」という功を持つていかれ、結局は万骨にされてしまった武将たちが数え切れない程いる。その中で自己主張と言うか「俺は此処に居た！」ということを経史に留めた人物も多いのである。後世の武士団はそうした有名人を祖先として家系図を作つた。勿論、真偽の

程は確認する術が無い。徳川幕府が諸大名の家系を申告させた際には、此の時とばかり怪しい家系図が役に立った。諸大名も徳川幕府の許で「せめて万骨にならないように」昔の有名人を利用したのである。これを幕府は半信半疑でも認めざるを得なかつた。トップに在る徳川氏の系図自体が怪しいから、諸家の家系にも文句が言えなかつたのである。担当した新井白石は「これで良いのであろうか？」と悩みながら仕事をした。

ギター文化館

2013 CONCERT SERIES

- 11月10日 啼鵬《バンドネオン》おがわゆみこ《オカリナ》
伴奏:高野行進《ギター》
11月24日 北口 功 ギターリサイタル
12月 1日 松田結子 ギターコンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

当然ながら、諸大名は徳川幕府の受けを良くしようとする。徳川氏が清和源氏（新田系）にしたので大名も清和源氏を多く使った。大雑把な数字だが「藩翰譜」に登録した二百家程の大名中で百家ぐらいが源氏だと言っている。源氏も村上系、宇多系、嵯峨系などあるが、徳川に合わせた清和源氏が大部分である。藤原系は六十余家、物部、橘、在原、菅原、紀、大江などの名族が少数派で、平氏系も二十家近く居る。平氏系だ、と主張する武士団の大部分が桓武平氏（常陸平氏）であることは平氏の発祥を考えれば当然かも知れない。

豊臣秀吉の正室・寧々（高宮院）の出た杉原氏は平貞盛の後胤を主張しているが本当なら野蚕で残酷な猿の奥さんには勿体なかった。意外なのは関ヶ原合戦開始前に徳川家康を悩ませた上杉家で江戸時代には吉良上野介の息子が養子になったが本来は藤原系なのに上杉謙信が長尾氏を継いでいたため桓武平氏の平良文流に変わる。始祖・良文は平将門の叔父であるが中立を守ったことで知られており藤原権力に抵抗した平忠常の祖父になる。伊豆の拳兵に失敗した源頼朝が再起出来たのは房総半島に定着した忠常の子孫たち（千葉氏ら）が味方に付いてくれたからである。この系統の分流が勇壮な「野馬追い」で知られる相馬藩になる。

仙台の伊達氏や秋田へ飛ばされた佐竹、或いは南部など東北地方の諸大名も、それぞれに祖先を主張しているが、その中に常陸国に興った桓武平氏・平繁盛流に結び付く大名が居た。この家系は余五將軍（維茂）から伝わった北陸の勇者・城一族のように華々しくは無かったが、明治維新まで「桓武平氏」を残したことになる。常陸国では有名ななれなかつた繁盛さんの為に子孫が頑張って万骨

の意地を示してくれたのであろう。簡単なようでこれは実現が難しいことである。

既に述べたように平繁盛の子で知られているのは常陸国を相続して大掾氏を伝えた維幹と、余五將軍と言われた維茂などであるが、その他に平安忠（やすただ）という人物が居て陸奥権守（むつこの）かみになった。この地位は単純に言えば国主代理のようなものであるが懲罰で任命される場合もある。安忠がどちらだったかは分からない。安忠の子を則道と言いつ岩城次郎と名乗った。岩城氏は則道を祖としている。次の貞衡は常陸介となり事実上の国司として父祖の地に錦を飾った。

貞衡の子・繁衡と次の忠衡は常陸大掾になっているから、その三代は常陸国府に居たのかも知れない。繁盛が生きていたら泣いて喜んだことであろう。忠衡の子が前九年の合戦により奥州一の豪族となった清原氏の当主・真衡の養子に望まれた成衡である。海道小太郎と称していた。花嫁として常陸大掾多氣致幹の孫娘が選ばれた。その辺りのことは第四章で触れたが、縁談が進められたのも花婿の父と祖父が常陸国府に勤務していたからであろう。花嫁の父は前九年合戦の際の將軍・源頼義であるから、花嫁は八幡太郎義家の異母妹に当る。新郎新婦に罪は無いが、この二人の結婚式が「後三年の役」の発端となるのである。

合戦の余波で若い夫婦は結果的に命を落としたと思うのだが、岩城氏の家系は成衡の後に隆衡―隆守―義衡…と続き、海道小太郎から十二代目に家系が絶える。喰うか食われるかの戦国時代であるから仙台の伊達晴宗が、すかさず養子を送り込んできた。これが岩城左京大夫親隆である。其の子・常隆も二十代で死亡したので、今度は常陸国

から佐竹義重が三男を岩城貞隆として入れたが、伊達も当時の佐竹も藤原系になる。丁度、関ヶ原合戦に遭遇、実家の佐竹氏が「中立を守る」と偉そうに恰好をつけたから岩城氏もそれに従って関ヶ原へ行かなかった。

戦後の査定で佐竹は秋田へ移されたけれども付属物のような岩城藩は領地没収の憂き目を見た。暫くは佐竹の居候で過ごした後に心を入れ替えて大阪冬の陣に兵を出し、徳川家康の参謀である本多正信の軍に加えて貰った。これが当たって川中島に一万石を貰った。桓武平氏と川中島とは合わないが、上杉謙信に引っかけた何とか頑張っているうちに秋田県の由利に二万石を頂戴することが出来て「亀田藩」として、何とか桓武平氏繁盛流を幕末まで伝えることができたのである。

平家物語には平清盛が格段の出世をして、吾が身の栄花のみならず一門共に繁昌し…世には又（平家以外には）人無くぞ見えられける…と書かれているがそれも夢で、木曾義仲や源義経の活躍で瞬く間に没落してしまう。つまり桓武平氏はこれでお終いになった訳である。平安博物館の館長兼教授で歴史学の大家であられた角田文衛さんは、家としての平家は滅びても、平清盛の血筋が公家に入り伝わって現代の皇室に及んでいる…と言われたが、一般には知られていないことである。特に桓武平氏の中でも早くから公家化していた高棟流の血筋は連綿として伝わっているらしい。皇室のことはともかく、常陸国を発祥とする高望流は最終的には滅びたとしても、平安時代末期に一世を風靡したのであるから良しとするほかはない。

この稿では、平清盛の祖先に当たる平貞盛が平将門事件で名を挙げた陰に隠れて、その消息が分

からない弟の平繁盛について訪ねてみたのであるが其の子孫が桓武平氏の誇りを伝えて幕末まで存在したことは驚異に値いすることであると思う。

繁盛がどこで暮らし、何処で死に、何処に葬られたのかなどは全くわからないけれども、天下を手中にした平清盛一族は源氏に追われて都を去るに当たり、墓地を掘り返して先祖の遺骨を移したと言われているから「死者は移動する…」現代のように菩提寺を決めておけば良いという訳でも無さそうである。浮き沈みの激しかった昔は死んだ後のことまで面倒を見て貰えなかったのかも…

功成った将でも「万骨枯るる」という見えない法則?には勝てず、嘘の多い虚しい名声のみが大げさに伝わる…そういう意味においては平将門追討の実行面で主役を演じながら、存在が分らない平繁盛が常陸国に何も残していなくても、各地に散った子孫たちはそれぞれの土地で「桓武平氏」の末裔として万骨をすり減らしながら活躍していた―歴史とは現代に生きる者が過去の出来事をするどのように受け止めるかの問題なのであろう。

(第六章 終)

(お詫び)

先月号で打田昇三の「虚構と真実の谷間」は今月号で最終回とお知らせいたしました。最終章の「神話社会への潜入」が12月、1月の掲載となりますので、打田昇三私翻「平家物語」は2月号より掲載させていただきます。訂正とお詫び申し上げます。

2月号からの私翻平家物語にご期待ください。

【風の談話室】

日の移ろいとはなんて速いことだろうか。

二つは座の東京公演が無事終わり、一寸の間ホッと一息ついていたら、もう霜降月になってしまった。

庭の枯草に螻蛄が死んで土に還ろうとしているのを見つけたとしても不思議なことではなく、当たり前前に季節が移ろったこと事なのである。

東京公演では、案内を出す事を忘れていた人が来てくれたり、脚本仲間がどこかで聞きつけて来てくれたり、嬉しいことが多々あったが、資金の残務整理が残り、当初から分かつてはいたが矢張り、明日には全ての残務整理をしなければならぬ時が目前に来ると、講演内容の評価とは別に悩ましい気分となる。

しかし、明日に繋がる良い事も多く、頭を抱えながらも東京公演はやって良かったと思っている。

《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

東京公演成功おめでとう

市川紀行

両国シアターXの公演成功を祝します。長い時間のご苦労が見事に報われました。白井さんにとっては久しぶりの東京凱旋ですね。以下急いで短く勝手に書かせていただきます。

この公演を初日に見た方から(わたしと妻は最終日)「お先に感動をもらって来た。素敵だった」とメールを頂いていた。その言葉通りだった。舞台パフォーマンスも音楽も引き込まれるようだった。

これまでの積み重ねがシアターXという場所と空間をえて、いわば本格的舞い舞台演劇として感動を創り出したともいえる。

白井さんの朗読の「しらべ」と小林さんの手話舞い、柏木さんのダンスの織り成す陰影と情感は今までにない美しさと悲しさを伝えて余りあるものだった。手話舞いがひとつの「完成」を見せた瞬間でもあった。

白井さんのせりふ朗読まわしについて私が言うことは何もない。あえていえば能舞台の響きを新たにいれて手話舞いに動きのリズムの格調を生み出していた。すごいものだったと思う。

小林さんの本格公演にむけて成長した姿はなんと目をみはるものだったろうか。大きな手と身体の振る舞い、見事な足とつま先の作法、顔に滲む感情の豊かさ、いままでとはまったく違ったといったら叱られるだろうか。「世界で初めて」の手話舞いを本当に演じたのは間違いない。将門がそこにいた。才能と努力の花を見せていただいた思いである。

柏木さんのロマン表出にはいつも心打たれる。さくら姫の愛と苦しみと希望に涙をこらえきれなかった。ダンスの本質は愛の中で成就することを教えてくれる。当然のことながら生の音楽演奏も舞台上に調和し舞台を支えてさすがと感銘的であった。山本さんが質の高い活動を広げておられるのもうれしい限りであった。

ママコ女史について触れる資格は無い。女史が現れるとせまい舞台がなんと大きく広がって見えたことだろうか。一流の姿を垣間見ただけでも幸せであった。道化の登場にふとシェークスピア「夏の夜の夢」のバックを思ったとだけ付け加えたい。

兼平さんの舞台美術も存在感があり、一層象徴的であった。面相画の何枚かがひらひら舞台の風にひらめき、照明に反射して見えない物語の影を映しているようであった。ふしぎな舞台装置である。

久しぶりにいい時間を与えてくれたことば座公演に感謝し急ぎの御礼にかえる次第である。

《ことば座だより》

東京公演

小林幸枝

何時かは東京で公演をしようね、と劇団創設当時から言われていましたが、劇団員が入ってくるわけでもなく、なかなか難しい事だなど思っていました。しかし、柏木久美子さんとの共演が実現してから、新しい展開が始まってきました。

実現はしませんでした、マカオでの公演の話が出たり、NHKで手話舞を紹介する番組を作って頂いたりしました。そして、昨年末に、両国のシアターXでの公演が決まりました。

東京公演では、思いもよらなかった大先輩の、日本のマイム界の巨星であるヨネヤママコさんとの共演もいただくこととなったのです。

待ち焦がれていた一年はあつと言う間に過ぎて、十月二十三日から二十五日の本番三日間がやってきました。聴覚障害の仲間がこんなに沢山集まった事はなかったのではないかと思うぐらい大勢応援が集まってくれました。

「新説日本組曲」として今回の苺萱姫物語のための編曲を橋爪さんの音楽監督のもとに山本光さ

んが完成し、その生演奏の前で演技する事の感激と言ったら、心が震え、言葉で説明することは出来ません。

今回の舞台では、物語をガイドする朗読の部分を、マコさんのお弟子さんである明神さんが、マイムに手話を少し加えての演技をしていただきました。私が手話朗読したのを明神さんが見て、工夫してくれたもので、聾者の人達が見ても物語の内容がわかる楽しいものとなりました。機会があれば、ぜひ明神さんと二人の舞台を創ってみたら面白いのではないかと思います。

衣装やメイク、照明なども私の想像するものとは全く違い、演出の白井先生の「アバンギャルドに」というキーワードに全員の創造力が自在に発展して、これしかないというものに創り上げられていく過程を始めて体験し、舞台表現の面白さを改めて教えて頂きました。

マコさんの決して妥協しない自分の表現創りにも大きな感動を覚えました。小柄なマコさんが舞台にマイムダンスすると舞台が小さく見えるのは、心の迫力が演技の大きさを創るのだという事を教えて頂きました。

公演が終わって疲れている筈なのに、もう次の舞台をやりたいという気持ちが湧いてきました。そんな私の気持ちが届いたのか、今回の衣装を担当して頂いた熊谷敬子さんから、敬子さんの行っている朗読会では是非一緒にやってみませんかというお話を頂きました。何だか急に目の前の世界が広がってきたようで、大変うれしく思っています。

皆様の温かいご声援、有り難うございました。

脚本家の眩き・ぼやき

白井啓治

日本組曲を主題とする将門伝説・苺萱姫物語の両国シアターXでの公演が無事に終わった。概ね好意的な評を頂くことが出来、先ずは一安心と言う所である。

脚本家仲間、演劇仲間などが連絡もなくふらりと寄ってくれた事は嬉しい事であった。仲間達はその分厳しい論評を届けてくれた。しかし、論評が厳しくなるのは当りまえの事で、それだけ確りと観て論評してくれたのである。それこそ筈にも棒にもかからぬものであれば、誰一人評を論じてくれるものはいないだろう。かくいう私も同様である。

さて、一つの作品創りをする時には、そこには必ず前提条件というものが突き付けられる。一度ぐらい何の条件も付けられぬ仕事をしたものだと思うが、舞台だとか映画の世界に前提条件の付かない作品創りはない。

勿論、脚本家が舞台化、映画化されることを期待しないで、自分の脚本としての作品を書くことはあるが、それを書いても小説家のように出版されて読まれるという事は殆ど、というか全くないと言える。

《ぶら》

アレンジ・蕎麦・蕎麦会席料理のお店です。

(ギター文化館通り)

看板娘(大)「うらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話03-6454-0000

仮に、そうした作品を書いて誰かの目に止まり、舞台化、映画化という事になると、作品化するために色々な条件が出され、それを満たすべく脚本の書き換え、変更をさせられることになる。これは脚本というのは小説のような完成した読み本ではなく、人が演ずることによって完成していく設計図と言えるものだからである。卑下するように言うと、脚本とは完成品ではなく半製品だから、ということになる。

しかし、脚本が悪いと舞台も映画も碌なものにならない。演出の立場に立って脚本を言うと、脚本とは思想の幹であって演出はその幹に枝葉や花を咲かせるのが仕事、という事になる。

今回公演した「荳蔻姫物語」を、ホルストの日本組曲を主題とした三つのジェスチャーによる朗読舞劇、というだけの条件で脚本を書き上げたとしたらどうなるのであろうか。そんな事は考えた事はないが、恐らく三つのジェスチャーの直接対話という朗読舞劇を構築しただろうと思う。勿論朗読は小生の朗読ではなく、白石加代子が行っているような朗読劇が出来るキャストイングになってくるだろうと思う。

手話舞、テンジエスチャー、マイムダンスという三つのジェスチャーに舞台上で直接対話するという舞劇に仕立てたとすれば、実際にそのことが可能な演技者は、現状ではママコ女史一人だろう。今回の実際の舞台上で朗読を主旋律として、音楽をスパイスとした表現が出来たのはママコ女史だけである。

朗読を主旋律としてマイムダンスを構築してほしいと話した時に、演出家の意図を明確に組むことが出来たのはママコ女史だけであった。そして

彼女は、マリオネットの曲を自分のマイムダンスという料理のスパイスとしての位置づけをしつかりと構築したのであった。その事は流石お見事というほかはなかった。女史の感覚の中には、マリオネットの曲で道化のマイムダンスをすると言うものはなかった。道化をマイムダンス演技する主旋律はあくまでも詩の朗読であった。

巨星ママコ女史のこうした創造の姿を直接そばで見て、実感することが出来た小林には、この先そんなチャンスに巡り合う事は、なかなかないだろう。今回の公演で一番多くのものを得たのは、小林ではなかっただろうか。

さて、今回の脚本では三つのジェスチャーが直接対話し合うという構成は取れなかったのであるが、それは脚本家に課せられた一つの条件であるので、その事に不満を持っているわけではない。そんな事に不満を持っていたのでは脚本は書けない。演技者の表現の技量がまちまちであるというのは当初からの条件であれば、その条件を限定条件ではなく十分条件として構築することが要求されるのである。此の事自体は脚本を書くことの一つの面白さではあるのだが、同時にフラストレーションの溜まる作業でもある。

こういうストレスの中で仕事とはいえよくも何十年もやって来られたものだといながら感心する。こんな風に脚本家としてボヤキ、呟くと、じゃあ今回の公演は失敗か、と言う人がいるだろう。そうではない。今回の公演は、色々な評はあるだろうが、また欲を言えばこうだった、という部分はあがるが、現状の最高点で終えたと言える。自己弁護や自画自賛ではなく、現状での最高点をつけていいだろう思っている。

脚本家も演出家もそうであるが、なかなか本音を吐く訳にはいかないものである。しかし、現状に満足したり、現状を絶対視してしまうと新しいものは生まれてこない。此処に少し吐露したことは、脚本家であれば誰でも思っている事であるし、それに甘んじている訳ではないがその中で少しでも現状を突き破らんとがいているのである。

《一寸一言・もう一言》

このコーナーを開設したのは8月号からであった。そのうちにこのコーナーが全体を取って代わらんかのよつな勢いである。日常の中で、一寸物申したい事が山のようにある事の証拠の様である。そこで今回は、紙面に余裕もある事なので、少し多めに紹介してみたいと思う。

打田昇三のもう一言

「コロンプスの著(いも)」

スペイン南部、アンダルシア平原を横断するよりに流れるグアダルキビル川は、世界周航のマゼラン、米大陸発見のアメリカ・ベスプッチ、そしてコロンプスが船出した川である。下流域に在るアンダルシア地方第一の都市セビリアは「カルメーン」の舞台として知られるが、コロンプスは其処の大寺院に四人の王が棺を担ぐ形の墓所に眠っている。寺院の内部は金銀を思い切り使った荘重華麗なものであって、その資源はアメリカ大陸から持ち出されており、他の大都市にある寺院の秘宝

などを合わせると膨大な量の財宝になる。

西暦一四九二年八月に船出したコロンブスの船団が七〇日目の夜を航行中のこと、大部分の者は眠っていたが見張り役の水夫ベルメーホが薄い月明かりに現在のバハマ諸島を見つけたのである。約束では手柄も共有の筈であったが、結局はコロンブスが大陸の発見者としての栄光と財宝とを独占した。都合、四回に亘る航海で船長以下全船員が離反してコロンブスの人望は低下、失意のうちに世を去ったが、莫大な遺産を使った子孫によりスペイン名士の地位を得た。

俗説ではコロンブスが大陸から持ち帰ったのは馬鈴薯と煙草と性病の三つになっている。性病は論外だが馬鈴薯は人類の飢餓を救う。コロンブスが謙虚な人物であったならば、カルメンが居なくともセビリアは世界の有名都市になっていた筈である。

「過ぎたるは…」

研究熱心の余り、テーマに没頭すると思いついたことをメモにして机の周りに貼りまわし遂には部下の机まで占領する上司が居た。共存社会では相手に対して配慮しないと迷惑が掛かるか、目的が達せられないことも起きる。

紀元前七、八百年頃に中央アジア、西アジアからトルコ、エジプト辺りまで支配したアケメネス王朝ペルシア帝国の初代ダレイオス（ダリウス）大王は、イラン北西部のイラク国境に近い街道沿いに自分の功績を称える記念碑を残した。当時の強大国を倒して無名のペルシアを世界初の帝国にし

たのであるから後の世に自慢をしたい気持ちは分かるが、記念碑を残した場所が良くない。

街道（シルクロード）沿いではあるが地上七〇メートルの断崖絶壁（巻）に彫らせたので、諸民族に知らせようと当時の四か国の文字を使っているながら現場を登れる者は居なくて二千五百年以上も読まれることが無かった。西暦千八百年代に英国人のローリンソンが命懸けで現場に到達し、古代ペルシア語など四種類の文字で書かれた大王の自慢をやっと解読してくれた。そのお蔭でペルシア帝国初期の歴史が解明されたのである。

破壊される心配から絶壁を選んだらしいのだが誰にも読まれなくては「子供の落書き」に劣る。

菅原茂美の一寸一言

「犬のルーツ」

犬はネコ目イヌ科の哺乳類。人類が家畜化した最古の動物と言われる。犬は先史時代からあらゆる地域と文化の中で仕事のパートナーあるいはペットとして人間と共存してきた。イエネコのルーツはリビヤヤマネコが元祖であることは以前にも記載した。

さてイヌの元祖はオオカミとされてきたが、いつ・どこで家畜化されたかは不明であった。しかし、02年国際研究チームにより世界中654頭のイヌと38頭のオオカミのミトコンドリアDNA解析の結果、約1万5千年前、東アジアでタイリクオオカミが家畜化され、人の移動に伴って世界中に広まったと結論された。南北アメリカ大陸のイヌは、1万4千年ほど前、

ベーリング地峡を渡り、人とともに移住したと考えられる。

なお、イヌとオオカミの決定的相違はデンプンを消化する遺伝子群が犬にはあり狼にはないことである。イヌの染色体は38対76本で、血液型は8種。これはオオカミ・コヨーテ・ジャッカル・ディンゴも同じで、交配可能。その交雑種は生殖能を持つ。それゆえ近年は、イヌは狼の亜種とする考えが主流である。

イヌの嗅覚は人の数万倍とされるが、イノシシもイヌと同格とされ、クマはイヌの7倍、ゾウは更にその上の嗅覚を持つといわれる。盲導犬は交通信号を識別するとされるが、点燈順序や人の動きから学習したものであり、本来全盲に近いと言われる。またイヌとオオカミの交雑種で、オオカミの血が75%以上のものはイヌより聴力・嗅覚が優れていると言われる。

「梅根性・柿根性」

私の大好きな「柿」の季節となった。思い出すと終戦直後、子供は学校から帰ってきて、勿論おやつなどあるうはずもない。私は鞆を放り投げ、すぐ庭の大きな柿の木によじ登り、いい色の柿を存分に食べた。東北の農家の子供は、庭や畑には、年中何かが実っており空腹は満たされた。しかも生家は酪農家のため、自分で搾乳をして、牛小屋でたっぷり牛乳を飲むことができた。盗飲？…食糧難の時代とは言え、農家の子供は、こうして诗情豊かに成長することができた。生家に感謝。

さて現在。柿の季節を迎え、昔を思い出しなが

ら、豊かな秋の実りを堪能し、徒然なるままに、広辞苑の「柿」をキーワードにめぐっていくと、今まで私の知らなかった「柿根性」という字が出てきた。意味は「柔軟な性格」を意味し、対義語に「梅根性」があり、その意味は「思いこんだら譲らない頑固な性格」とあった。

梅は、寒風荒ぶ(すきぶ)早春、凜として咲き誇り、安易な妥協は許さない、高貴な気品を感じる。決して、へりくだったり、他に阿る(おもねる)感じはない。それに対し私は、柿根性の見本みたいに、他と争いは極力避けたい。兄弟も多かったせいか、ケンカしてまで己を通そうとは思わない。しかし、優柔不断な自分の性格に嫌気がさす事もある。ところがある日の新聞歌壇に、梅根性の自分の性格に嫌気がさし、自分の頭を三つ叩いた：という句が乗っていた。

考えてみれば、梅も柿も、その根性は極端ならば、大きな欠点であろう。人間誰でも両者を持ち合わせている。バランスよくセルフコントロールできれば、真の大人といえるのかもしれない。

瘦風の吹いて一行

雨 露

- ・ 秋風に吹かれて里道を一人行く
- ・ ぽつぽつとぽつぽつと枯れ葉ちる声
- ・ 名もなき青の小花に心うばわれて
- ・ 枯れた雑草にも草紅葉といふおしやれ
- ・ 生垣のおもしろうもない常緑樹
- ・ みれんがましくカンナの花の赤ひとつ
- ・ 一人残されてトマトの実の赤さよ
- ・ 凍える小雨に鶉の声高く

何はともあれ思った事、気が付いた事を声に出してそのまま文章に落としてみる。

打田兄ではないが、思いを文字に残すことが出来るのは、生物の中で人間だけ。言葉を文字に落とせないのは人間を放棄する事。

正にその通りだと思つ。

だがここで問題にされるのは「上手」「下手」。思いを文の言葉に落とすことに上手下手など無いといつのになぜか上手下手を口にし、問題にする。紅い花がきれいに見えたのだったら、「綺麗な赤い花」と書けばいい。何故綺麗に見えたのかなんて説明されても困る。

学校の、小学校の授業で「何故綺麗に見えたのか説明しないといけないでしょう」なんてことを言われたおかげで言葉を文に落とすことを嫌になつてしまつた。

紅い花が綺麗だつたと、言葉を文に落とせない人がその理由は？ なんてことを言つても始まらない。綺麗に思ったのはさう感じたから。

人間万歳。
人生万歳。

さう思つたらその言葉を文字に落とさう。

風の談話室へのご投稿をお待ちしています。

毎月、二十五日が締め切りです。

十二月号は七日発行になります。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ことば座「朗読教室」受講生募集中!!

朗読は演劇です。このことを忘れて、スラスラよどみなく標準語で読むものだと思つていませんか。朗読は、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)表現者(朗読者)の心を演じることです。物語とは、はじめに言葉があつて紡がれたのではなく、はじめに作者の心があつて言葉に紡がれたものです。

物語(詩)を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)そのドラマ(物語)を演じる必要があります。

ことば座では、ふる里「常世の国の物語」を、朗読表現する俳優の育成を考えています。

月二回程度の授業を考えております。(受講料月額 3,000 円)

ことば座の脚本・演出家:白井啓治が丁寧に指導します。

朗読表現に興味をお持ちの方連絡をお待ちしております。

連絡先 080-3125-1307(白井)